

ブルーストとビシャ 間歇性と習慣の二つの理論（その3）

沖 田 吉 穂

Ⅲ 愛の思考習慣とその忘却の物語（承前）

2. 時間の細分化と映像の無限増殖

「消え去ったアルベルチヌス」の末尾から「見出された時」の冒頭にかけて、サン＝ルーと結婚したジルベルトを、語り手がコンプレー近くのタンソンヴィルに訪問する一節がある。ここで、男女それぞれの同性愛が一般的な形で話題になり、語り手はサン＝ルー夫人ジルベルトに対し、アルベルチヌスがそうした好みを持っていなかったかどうか尋ねている。この二人の女性の間に物語の中でほとんど交流はないものの、学校時代から彼女たちは知りあいではあったからである。語り手を長く苦しめてきたこの疑問点に関して、ジルベルトから新たな情報が提供されることは無論ない。しかし彼女はここでそうした主題を扱っている小説としてバルザックの『金色の目の娘』をあげ、バルザック好きのゲルマント家の叔父たちに負けぬようそれを今読んでいるのだが、悪夢のような、ありそうもない馬鹿げた話だと言う。

この中編小説の中では、異国の若い魅力的な娘が別の女に文字通り幽閉されており、彼女の外出には常にお供の女性が監視役として付き添っているが、事情を十分知らず、状況の困難に刺激されて「金色の目の娘」との冒険を企てた男は、自分の目の前で彼女が女主人により殺害されるのを見ることになる。こんな風に女が女に監視されるのはあるかも知れないが、女が男に監視されるのは決してないだろう、とジルベルトが付言すると、語り手はアルベルチヌスとの関係を念頭に置きながら、しかし自分とは別の人間の行為として、愛する女を同様の監視下に置くにいたる男の存在に言及し、ジルベルトに認識不足であ

ることを示唆する¹⁾。

このくだりは小説がすでに「アルベルチヌの物語」からの離脱をほぼ完了した時点で、そのプロットモデルを提示し、祖型に対する同性愛と異性愛の置換も可能なことを主張するとともに、語り手にとっては「アルベルチヌとの冒険」を客観視する機会ともなっている。そのことで主観的な物語には、いわば「外部評価」の機会が与えられている。というのも外で出会う人間からの誘惑を絶つために恋人を隔離し監視するに至るというのは、嫉妬する人間の妄想に近い主観性のなせるわざであるということを語り手も認め、そうした筋書きは、善良な人間には嫌悪感を催さずにはおかぬ、というジルベルトの反応がそれを補強しているからである。こうした男女関係を人から聞くことがあれば、異性間の愛情形態である以上、その正規化（たとえば結婚）によって苦悩の多くは解消し、疑惑はあっても幽閉に近い拘束は不可能になるはずだと「外側から」は考えられるだろう。ジルベルトの表明する意見は、恐らくはそうした常識の反映であり、だからこそ結婚後に夫の同性愛がひそかな悩みの種となっても、彼女は語り手に結婚を勧め、「あなたの奥さんはあなたを回復させ、あなたは彼女を幸福にするでしょう」と述べるのであろう。ここで語り手は、自分も婚約はしたことがあるのだが結婚には踏み切れず、この「不決断で心配性の性格のために」、女のほうからそれを断念したのだと、それがアルベルチヌであるとは明かさずに手短かに報告する。

これがこの恋愛の顛末をもはや「外側から」しか見なくなった語り手の、最終的な自己評価であろうが、内面の苦悩を何よりも扱う「アルベルチヌとの冒険」自体を、このように要約することは無論できない。自分の「悪い性格」に原因を求めるのは、語り手が自分の恋愛経験を世間的な認識に依拠したりアリズム風の枠組みに従って整理するに至ったということを示している。しかしこれもまた一つの観点であり、そこに最終的な真実があるというわけではない。出奔中のアルベルチヌの死が伝えられて以降、物語の中心的な興味は、彼女に対する執着から無関心へと、長い時間をかけた語り手自身の心の変容過

程にある。そしてこの過程を一貫して、語り手とアルベルチヌとの生活の真実は、不確定なもの、複数の仮説の間をどこまでも揺れ動くものとして提示されている。複数の可能な読解を観点の取り方に応じて、ともに有効な、あるいは必要なものとして組み上げ、その間で決していずれかに固定することを許さないこと、これがこの一人称小説の引き受けている冒険である。それゆえ、語り手によるアルベルチヌとの生活の苦悩に満ちた想起が、純然たる内面の探求だけに還元しうるものでないことを示す場は、随所に用意されなければならないのである。嫉妬から愛の対象を嚴重な監視下に置こうとすれば、最初はそれを進んで受け入れた女の内にも脱出願望の形成を促し、その示す反応や行動が、今度は自分の心理にも新たな苦痛に満ちた問題を生起させることを、語り手は恋人の死後の苦悩のさなかで理解していた。「アルベルチヌとの冒険」が織りなすそうした内面と外面の相互依存関係を、語り手はこの物語の自己規定とも思わせる形で提示し、次のように省察している。

そんなわけで、自分では内に閉じこもっているつもりのこの魂の長い嘆きも、実は見かけの上でしか独白ではない。というのも現実の反響がこの嘆きを屈折させているからである。そしてこうした生活は自発的に追及する主観的な心理学の試みのようなものであるが、それは少し距離を置いて別の現実、別の生活を扱った純然たるリアリズム小説にその「筋」を提供していて、その波乱に満ちた展開がまた、心理学試論の流れを曲げ、方向を変えるという次第なのである²⁾。

アルベルチヌの事故死を、その叔母のボンタン夫人から電報で告げられ、またその直後に、恋人が死の直前に出した2通の手紙を受け取っても、われわれの主人公がその現場に駆けつけたり、あるいは葬儀に出席したり、という弔意行動への言及は全くない。その死を直接は確認していないからこそ、彼女が生きていて語り手にそれを知らせてきているという誤解（ジルベルトからの電

報をアルベルチヌスからのものと取り違える、ヴェネチア滞在中の署名の誤読)も成り立ちうるのであるが、現実味への配慮からアルベルチヌスの死を社会的に報告することは、この小説の関心の埒外にあると見るべきであろう。これ以降問題になるのは、自分の心の中ではどこまでも生きている彼女の心の映像が、ついには薄らいでゆくというプロセスであるが、しかし恋人の生前の行動に対する遡及的な調査はこれに作用を及ぼし、分析の装置にも変化を与えてゆく。

アルベルチヌスの死が私の苦しみを消滅させるには、この衝撃が彼女をトゥレーヌ地方において殺すだけでなく、私の内で殺してくれることが必要だったのである。私の心の中で、彼女はかつてなかったほど生気に満ちていた。一人の人間が心の内に入ってくるには、時間という形態をとり、その枠組みに従わねばならない。彼は連続する瞬時の中に登場するだけなので、一度にはただ一つの姿しか提供せず、ただ一枚の写真しか発行しない。瞬間のコレクションからなる他はないというのは、人間にとってなるほど大きな弱点であろうが、それは彼の強みでもある。彼は記憶に依存しており、一瞬の記憶というのは、それ以降生じたことを全く知らされていない。だが記憶が録画したこの瞬間はなおも持続し、なおも生きており、この瞬間とともに、そこに姿を見せる人間も生きているのである。そしてこうした細分化は死んだ女を生存させるだけでなく、彼女を増殖させる。自分を癒すために私が忘れなければならないのは、一人のアルベルチヌスではなく、数限りないアルベルチヌスであった。こちらの彼女を失った悲しみに耐えられるようになると、また別の彼女、百もの別の彼女について同じことを始めねばならないのである³⁾。

一人の人間が心の内で場所を占めるには、「時間という形態」をとり、その枠組みに従う他はない、と語り手は言う。つまり愛する人間は連続する瞬時の

中に登場するものとして心の中に取り込まれるので、写真集のように「瞬間のコレクション」としてまず存在することになる。これはスナップショットの連続であり、持続は瞬間の連続に還元されている。一瞬の記憶というのは、「それ以降生じたことを全く知らされていない」から、飛ぶ矢は静止した形で捉えられており、その形態で愛が生まれるのである。しかし人間が瞬時の映像として記憶に保存されると、この瞬時の記憶が持続する限り、そこに姿をみせている人間は、すでに死者となっていて心の中で生きている。そして極限までの持続の細分化には、細分化されたものの無限増加が伴うことになる。愛するものの瞬間の映像は数限りなく増殖しなければならない。こうして運動が、全体性が、持続する記憶の中で、持続である記憶の中で回復する。実際、しばらく先のページでは、こう述べられている。「こうした過去の瞬間は不動ではない。それらはわれわれの記憶の中で運動を保存していて、この運動がそれらを未来に向けて－それ自体過去になった未来に向けて－運んでいたものであり、われわれ自身もこの未来に向けて運ばれていた⁴⁾。」

それではアルベルチヌは本当に死んでいるのか、それとも生きていると言うべきなのか。物理的な事実と心の事実との間で、どちらを真実とみなすべきなのか。

二つの事実の間で私は選択をし、本当はどちらであるか決めなければならないようであった。彼女の死という事実は、トゥレーヌ地方での彼女の生活という、私の知らない現実からもたらされたものなので、彼女についての私のあらゆる思い、私の欲望、哀惜、愛情、怒り、嫉妬といったものと、それほどまでに矛盾していたからである。彼女の生活の目録から借りてくる思い出はかくも豊かであり、彼女の生活を喚起し、巻き込む感情はここまで過剰なので、そのことが彼女の死んだことを信じ難いものになっていた。感情のここまでの過剰と述べたのは、私の記憶は愛情を保存しつつ、これにあらゆる多様性を与えていたからである。瞬間の連続に過ぎないの

はアルベルチヌだけではなく、私もまたそうなのであった。彼女に対する私の愛は単純ではなく、未知のものに対する好奇心には官能の欲望が加わり、ほとんど家族的な幸福感には、ある時には無関心が、ある時にはさまざまな嫉妬が付加されていた。私は一人の人間ではなく、間断なく次々と姿をみせる寄せ集めの人の隊列なのであった。そこに登場するのは、時に応じて情熱家たちであったり無関心派であったり、嫉妬深い男どもであったりするのだが、この嫉妬深い男たちにしても一人として、同じ女に嫉妬しているのではない。そして私が望んではない治癒がある日訪れることになるのも、恐らくここに由来するのであろう。群れの中で、構成メンバーは気がつかないうちに一人ずつ他の人間に取って代わられ、これを更に別の人間が排除したり補強したりするので、最後には人が一人の人間であるならば考えられない変化が成就している。私の愛の、私の人格の複合性が、私の苦悩を増殖させ、多様化していたのである⁵⁾。

女が家を出奔した直後には、「われわれを構成する無数の取るに足りない自我」の一人一人に事実を通告する必要があった。そのことをまだ知らない多くの自我というのは、アルベルチヌが生活し、去った後の部屋のピアノやスリッパなど、主人公が用意し彼女が使った家具や生活用品に触発されて回帰するものであり、そこに宿る思いともみなせるものであった。彼女の死を知らされた直後から、次々に回帰するアルベルチヌの在りし日の映像は、季節の進行とともに次々と姿を変え、全体としておびただしい数に増殖していくことになる。薄暗い部屋の中にも屋外の光線や空気の重みを感じ取れる主人公の、寒暖や気圧の変化に敏感な晴雨計の形をした原始的な自我が、季節ごとに多様で、年齢に応じ、交際の段階に応じて変貌していったアルベルチヌの刻々の姿を蘇らせる。「大気の変化は人間の内側に他の変化を引き起こし、忘れられていた数々の自我を目覚めさせて、習慣から来るまどろみを妨げるので、あれこれの思い出、あれこれの苦しみに再び力を与える」のである⁶⁾。習

慣の感覚を鈍化する働きはここでも確認されているが、「太陽の年月」を「感情の年月」が裏打ちするので、アルベルチヌの思い出はすべての季節と結びつき、彼女を忘れるためには、すべての季節を忘れる他はない、とさえ語り手には思われる。

すでに見たように語り手が規定する自己の人格の複合性は、忘れられていた自我の間歇的な再浮上として記述され、その長い年月を隔てての回帰は、一見取るに足りない、しかし過去の印象を保存しているという点で貴重な、動作や感覚によって実現するのであった。祖母の死後一年以上経て始めて、その在りし日の優しさが鮮明な映像として蘇る「心情の間歇」のくだりでは、「魂の総体」という観念の虚構性を一般的に指摘しつつ、再生した過去とそれを再び生きる現在との明確に限定された対応によって、体験の単一性が保証されていた。「無意思的で完全な記憶」による「生きた現実の再発見」として、一連のいわゆる「無意志的想起」に繋がるものではあるが、こちらは時間を越えた事物の本質の啓示、創造行為への励ましといったメッセージ性を含んでおり、物語上の機能において役割は異なっている。「心情の間歇」は語り手を書く行為へと導くものとは位置づけられていないからである。しかし「心情の間歇」は主人公の精神生活のレベルで、物語内部での更なる展開の機会を「消え去ったアルベルチヌ」において持つのである。肉体的な死という事実と、心の中の生気に満ちた現前という現実との間の矛盾を再び顕在化させ、それを自我の複数性と間歇性から大規模に分析するという役割において、祖母からアルベルチヌへと、「魂の真実」の問題は完全に引き継がれている。祖母の復活を分析した部分とほぼ等価な省察が、手短にここでも再度なされていることは確認しておいてよいであろう。

人はその所有するものによってしか存在しておらず、また実際に現前しているものしか所有していない。そしてとても多くの思い出、とても多くの気分、とても多くの考えがわれわれ自身から遠く離れて旅に出るので、わ

れわれはそれらのものへの関心を失う。そうするとわれわれの存在という総体の中に、それらのものを勘定に入れることは、もはやできない。しかしそれらはわれわれのうちに戻ってくるための秘密の通路を持っているのである⁷⁾。

「心情の間歇」という表現はもはや用いられていない。アルベルチヌスは心の中で復活するだけでなく、おびただしい数の瞬間映像の連続として現れるのであり、そのためには感覚的な契機や自分の内部を探る努力はほとんど必要としていない。それどころか過去との同一感覚による無意思的想起は、「現在の瞬間から遠く離れた所へ」、アルベルチヌスとともに過ごした時間へと引き戻すので、むしろ忌避すべきものとなっている。大気の変化、時刻の移り、季節のめぐりだけで、あるいはその予感だけで、間歇的な自我は次々に目を覚まし、それに応じて彼女の生きた姿は無限に増殖するのである。

3. アルベルチヌスは有罪か、それとも「私」が有罪か

アルベルチヌスの過去の行動に対する遡及的な調査は、バルベックのグランドホテルでボーイ頭であったエメを現地に派遣することによってなされる。アルベルチヌスは同性愛の女でありながら、それをどこまでも語り手に対し否認し、隠そうとしたのか。そうであれば彼女は嘘つきの邪悪な女、自分の正体を偽り、祖国を裏切る女スパイと同様の罪深い女ということになる。それともそうした疑惑は完全な濡れ衣であり、若い女たちとの会う約束を重視し、互いに親密なところを見せたことがあっても、それは罪のない少女時代の戯れや交際に過ぎないものだったのか。

この問いは当然ながら、アルベルチヌスはなぜ自分のもとを去ったのか、という疑問とも対応している。語り手が彼女との生活に飽きはじめており、そうした気持ちの変化を彼女が感じ取ったという可能性についてはすでに見た。ただし彼女が出奔した後になって始めて、彼女が不可欠な存在であることを発見

した語り手には、もはやそうした経緯はほとんど忘れられている。そうすると、彼女が二人で続けてきた共同生活に終止符を打つという行動をとったのは、全く自由のようでありながら実は行動を監視され、何一つ不足はないように見えて実は檻ないし鳥籠に入れられている生活からの脱出を求めてであったと考えられる。しかしそうした監視を語り手が必要としたのは、アルベルチヌに対する外からの誘惑、つまり同性愛の女たちたちからの接触を絶つためであり、彼女に強いてきた生活形態の根源には、ヴァントゥイユ嬢との過去の交際を知らされて以来の、語り手の抱く重大な疑惑がある。そうした疑惑が根拠のないものであれば、アルベルチヌは語り手の妄想の犠牲者だったということになる。彼女を死に追いやったのは語り手自身ということになる。彼女の出奔は、そうした「囚われの女」としての生活形態の変更を言外に要求し、あるいは密かに期待した一種の条件闘争であったのか。彼女は「困い者」同然となっている自分の境遇を自覚し、煮え切らない語り手との交際に見切りをつけたのか。要するに彼女が期待していたのは結婚であったのか。それとも彼女が求めていた自由とは、語り手では決して与えられない種類の快樂にふける自由、サッフォーの末裔としての欲求をかなえるための行動であったのか。これが語り手にとっても、また読者にとっても、是非とも解き明かす必要のある真実である。有罪なのはアルベルチヌなのか、それともわれわれの主人公である「私」なのか。

振り返ってみれば、ヴァントゥイユ嬢とのつながりについて知らされる直前には、語り手はアルベルチヌとの交際を終わりにすることに意を決していた。彼女と結婚する意思はなく、会うことも止めるつもりであると母親に告げると、母親もそれを大いに喜んでいた⁸⁾。親の目からも、語り手ははるかに条件のいい結婚ができるはずだからである。ラ・ラスプリエールでのヴェルデュラン家の集まりからの帰途の列車の中で、この話をどう切り出そうかと考えているときに、心の大変動が生じたのであった。たまたま作曲家ヴァントゥイユに言及したことから、ヴァントゥイユ嬢の親友こそ、少女時代の自分を大切に

してくれた恩人であり、間もなくその人と再会する予定となっているとアルベルチヌスが語り手に告げたのである。たちまち再生されるのは、かつて興味深い見世物として茂みの中から覗き見たモンジューヴァンの光景、「とても長い年月留保されて」いながら「生きたまま保存されていた」映像であり、この映像は当時予感した「有害な力」を余すところなく発揮し、思いがけない形で語り手を処罰する⁹⁾。女友達との儀式化した挑発行為に戯れるヴァントゥイユ嬢の姿は、いまやアルベルチヌスの顔を持つものとなっている。その映像の与える激しい苦痛が、そのまま愛の証であるとはそこで述べられていない。しかし彼女だけが、この恐るべき毒に対する薬を差し伸べることができることを語り手は思い知る。それは毒と等質の治療薬である。「一方は甘美であり、もう一方は獐猛なものであるが、いずれも同様にアルベルチヌスから誘導されたもの」（ここでの「誘導」は化学的な意味）なのである¹⁰⁾。

ホテルに別の部屋を用意させてアルベルチヌスを引き止めた語り手は、結婚するはずだった別の女性と別れたばかりでとても辛いという虚構の話をして同伴と慰めを求めるが、そこで大きな遺産相続をしたばかりであり、結婚する予定だった女性には自動車やヨットを買い与えるなど、大いに贅沢をさせられたのだが、という話も付け加えている。自分の愛する人が、車やヨット航海の好きなアルベルチヌスであったなら、どんなによかっただろうと語り、直接相手に愛を告げるという「不用意」を慎重に避けながら、アルベルチヌスから見て「立派な結婚」の可能性もあることを十分に示唆しているのである。そこに働いているのは、「自分が愛するや否や相手からは愛してもらえなくなる」のであり、「ただ利害だけが女を自分に繋ぎ止める」という信念、ジルベルトに対する自分の実らなかった愛や、スワンのオデットに対する愛の顛末から引き出した教訓に由来する信念であると述べられている。そうした思い込みへの傾斜が過剰であったことは、次のように語り手自身が認めてもいる。「自分の嫉妬のために私が余りに過小評価していたのは、自分が人に抱かせることのできる感情であった。そして恐らくは誤っていたこうした判断から、私たちの上に降

りかかってくる多くの不幸が、多分生まれたのである」と¹¹⁾。パリの自宅で同居生活を始めた初期の段階では、彼女に「結婚の遠い可能性」を示唆しつつ、確約を与えることはせず、その代わりにできるだけ楽しさを与え、また贅沢をさせるように全力を注いだのであった。そうすることによって、「私との結婚を彼女が願うよう、多分無意識のうちにつとめてもいた」のである¹²⁾。

アルベルチヌの真意がどこにあったにせよ、彼女はすでに帰らぬ人となった。しかしその生きた姿は、生前にもまして心の中に現前している。アルベルチヌは心の中で生きているだけでなく、その本性についての謎を完全に保持したまま、この苦悩を癒すために戻ってきてくれることは決してない人間となった。毒は効き続けているのに、治療薬は決定的に失われたのである。彼女は生きたままの姿で、(今日風に言えば)任意に接近できる記憶に常駐しているので、自分を裏切って彼女の味わったはずの快樂は、そのまま現在の自分にとっての同じ強度をもつ苦痛となるのである。

私のうちでこれほど生きているアルベルチヌが、実際は亡くなっている
と考えるのは困難であったとすれば、アルベルチヌにもはや能力も責任
もない過去の過ちに対する疑いが、彼女が肉体も魂も失ってそれを味わっ
たり欲したりすることもできなくなった今になって、ここまでの苦しみを
私に掻き立てるのも、多分同じくらい矛盾しているであろう。(中略)も
はや他人と快樂を味わえない女は、もはや私の嫉妬を掻き立てないはずで
あった。しかしそれも、私の愛情が日付にあわせて更新しうるものであれ
ばのことであり、それは不可能なのであった。というのも、私の愛情はそ
の対象、すなわちアルベルチヌを、様々な記憶の中にしか見つけること
ができず、そこでは彼女は生きたままであったからである。彼女のことを
思うだけで、私は彼女を再生させたので、アルベルチヌの裏切りは決して
死者の裏切りとはなりえず、彼女が裏切りを働いた瞬間は彼女にとって
だけでなく、突如呼び起こされて彼女を見つめている私の自我の一つに

とっても、現在時となるのであった。その結果、新たな罪の女には、これと常に同時代の嫉妬する哀れな男がたちまち対をなし、密着したカップルを構成して、どんな時代錯誤もこの二人を引き離すことがない。(中略) いまや私の前に未来の分身のごときものとしてあるもの、(中略) それはもはやアルベルチヌの未来ではなく、彼女の過去なのであった。彼女の過去と言ったが、この表現は適切でない。というのも嫉妬にとっては過去も未来もなく、嫉妬が描き出すのは常に現在だからである¹³⁾。

少女時代にアルベルチヌは、ヴァントゥイユ嬢やその女友達と、語り手自身がかつてモンジューヴァンで目撃した種類の快樂を経験したのか。語り手との交際を深めつつあった頃にも、バルベックで、あるいはパリで、そうした機会を求めて行動したのか。さらにはその出奔以降、事故死するまでの間に、叔母の家の近くのトゥレーヌ地方で、自由になった彼女はそうした好みを持つ女たちとの交渉を持つことはなかったのか。どれか一つの時点でも確証を得ることができれば、アルベルチヌの本性は明らかになるはずである。すでに当人が亡くなっている以上、そうした交渉を持った女たちも、もはや憚りなく真相を語ってくれるのではないか。語り手がアルベルチヌの女友達に繰り返し探りを入れ、また証言を求めてエメをバルベックに、そしてトゥーレーヌへと現地調査の使命を託して派遣するのも、そうした推論によってである。語り手はこれを、一般法則を導こうとする実験科学のように確実な推論であると考えてる。

それに唯一つの事実であっても、それが選ばれたものであれば、実験者にとって、類似した幾千の事実についての真実を教えてくれる一般法則を決定するのに十分ではなかろうか。アルベルチヌは私の記憶の中で、生活中に次々と現れた状態で、つまり一連の分割された時間に従って細分化された形でしか姿を見せなかったとはいえ、私の思考は彼女のうちに一体性を復元し、彼女を再び一個の人間とするので、私はこの人間に対して一般

的判断を下し、彼女が私に嘘をついていたかどうか、女が好きで女たちと自由に交際するために私の許からはなれたのかどうかを、知りたいと思ったのである。シャワー係の女が言うことは、アルベルチヌの素行について私がもつ疑惑に対し、完全な決着をつけてくれるかも知れない¹⁴⁾。

エメに託された調査は、まずバルベックのホテルのシャワー室で、シャワーを浴びるだけではない利用がある種の女たちによってなされているという噂にもとづき、その仲間にアルベルチヌも加わっていたのかどうかを明らかにしようとするものである。シャワー室で使うバスローブのことを話すと、アルベルチヌが顔を赤らめたことも思い出された¹⁵⁾。シャワー係から得られた証言は、アルベルチヌがグレーの服を着た背の高い年上の女性と一緒にシャワー室によくやってきて、長い間個室に入ったこと、シャワー係には毎回10フラン以上のチップが与えられたこと、このグレーの服の女性はよく若い娘を探していたことで覚えがあることなどであり、エメは語り手の想像した事柄は確実であると言う¹⁶⁾。語り手はこうした生活の細部が、部外者から見れば取るに足りない事柄であることも承知している。しかしアルベルチヌについては、その本質に関わる疑いを抱いている以上、個別の事実こそが深部へと達する射程を持っている。語り手はアルベルチヌがグレーの服の女性と連れそってシャワー室にやって来るところを思い描くが、自分の抱く肉体的な欲望をもとにして彼女の欲望を想像するので、想像する欲望の強度が大きければ大きいほど、それはそれだけ凶暴な責め苦へと変化する。あたかもこの「感性の代数学」では、あらゆる欲望が「同じ係数のまま、正の符号から負の符号へと変わって再び現れる」かのように¹⁷⁾。

なるほどこうした映像が私に肉体的な苦痛を引き起こし、もはやそれと切り離せないものとなったのは、これがアルベルチヌの有罪性という恐るべき知らせをもたらすものであったからである。しかし苦痛はたちまち映

像に対し、逆に作用を及ぼしていた。映像のような客観的な事柄も、それを見る際の内的な状態によって異なったものとなる。そして苦痛というのは、現実に変更を加えるものとして、醜態と同じくらい強力である。こうした映像と結合することによって、苦痛はこうした映像に手を加え、グレーの服の婦人やチップやシャワー室（中略）といったものが通常表すものの、自分以外の誰にでも持つ意味とは全く異なった何かに、たちまち変化させていたのである。こうした映像すべては私が今まで思ってもみたことがないような嘘と過ちの生活から漏れ出たものなので、私の苦しみはこれらの映像をその素材自体においてたちまち変質させていた。私はこうした映像を地上の光景を照らす光のもとには見ておらず、それは別の世界、未知の呪われた惑星の断片、地獄の眺めとなっていたのである¹⁸⁾。

苦痛は思い描く光景と結合して、ほとんど化学的变化に近い「素材の変質」をこの映像にもたらし、語り手にとってバルベック全体が、言わば硫黄質の匂いのする地獄へと相貌を一変させたかに思えるのであるが、この地獄絵は別の記憶の助けによって一旦解消される。シャワー係の女は嘘をつくのが病気のようになっている、と言った祖母の言葉を思い出したのである¹⁹⁾。そうするとこの女がエメに語ったことは、何ごとでもなかったと思えてくる。しかし彼女に関する忘れていた瞬間、「その過ちについて考える習慣がこの過ちのもつ力を鈍化させておらず、そこではなおもアルベルチヌが生きている瞬間」は、新聞で見かける言葉など些細なことで相変わらず蘇ってくる。そうした瞬間へと移し替えられると、彼女の過ちはその度に、「より身近で、より不安で、より残酷な」色彩を帯びる²⁰⁾。一つの映像の持つ毒が無害化しても、疑惑自体は解消されないのである。そこで語り手は出奔後のアルベルチヌの行動から彼女の本性を明らかにすべく、エメを改めてトゥレーヌ地方、ボンタン夫人の住まいの近辺へと派遣することになる。

エメが語り手に報告することになるのは、アルベルチヌと実際に交渉を

持ったという洗濯女の話である。エメはロワール川の岸辺での水浴とそれに続く木陰での愛撫の様を聞くだけにとどまらず、この女を宿に誘ってその技を再現させることまでして確認した情報を、語り手に手紙で伝えてくる。そこでは「ああ、天にも昇る心地よ」というアルベルチヌの言葉、興奮のあまり彼女が囁んだという洗濯女の腕に残る跡形など、生々しい証拠が揃えられており、これを読む語り手の苦痛は絶頂に達する²¹⁾。ここで語り手が思い浮かべる映像は観念的な地獄絵に代わって、美術史の上でよく知られたモチーフを扱う二つの絵画（水浴図および白鳥と交わるレーダ）であり、嫉妬する想像力が作用する痛覚はこれら二つの映像の官能性により高感度に担保されている²²⁾。

「われわれが感じることはわれわれにとってだけ存在しているのだが、われわれはそれを過去に未来に投影し、死という虚構の障壁には阻まれることがない²³⁾。」そんなわけで、語り手は、自分が全てを知ったことをアルベルチヌに言ってやりたいと思う。そうした願望から、死者の魂をこの世に呼び戻すように、彼女を目の前に呼び出して、仮想の会話が生きていたときのように再開する。

この洗濯女の映像に対して私を救い出しに来てくれたもの、それはこれがしばらく続いた後のことであるが、それはこの映像自体なのであった。というのもわれわれは新しいもの、われわれの感性に音調や色調の変化を突然に導入してわれわれを驚かせるもの、習慣によってその冴えない複製にはまだ置き換えられていないものしか本当には認識しないからである。しかしそれは何よりも、あの数多くの部分へのアルベルチヌの分割、私のうちでの彼女の唯一の存在様式といえる、あの数多くのアルベルチヌへの細分化のおかげなのであった。彼女がただ善良で、頭がよく、真面目で、何よりスポーツが好きな人間であった瞬間は、幾度も私のうちに回帰してきた。そしてこの細分化についていえば、これが私の気持ちを静めてくれるのも当然ではなかっただろうか。というのも、それ自体としては実在性

を持たず、彼女が私に姿を見せた時間の連続する形態、つまり私の記憶の形態に由来するとはいえ、(中略)この細分化はそれなりの流儀で全く客観的な一つの真実を表現しているのではないかと思えるからである。すなわちわれわれ各人は一人ではなく、数多くの人格を内に含んでいて、そうした人格がみな、道徳的に同じ価値を示すわけではないので、たとえ邪悪なアルベルチヌが存在していたとしても、それは他のアルベルチヌもまた存在し、部屋で私とサン＝シモンについて語るのを好んだ彼女も存在した、ということを妨げはしないのである²⁴⁾。

語り手は洗濯女の話は本当かと眼前にいるアルベルチヌに優しく尋ねる。すると彼女は決してそんなことはない、エメはさほど誠実な人間ではなく、与えられたお金に見合うだけの仕事はしたというところを見せたいので、獲物なしに戻ってくることはできず、自分が望んでいることを洗濯女には言わせたのだと、誓って言うのである。語り手はこの言葉をそのまま信用するわけではない。アルベルチヌは恐らくいつも嘘をついていたのであろうと思う。しかし生前には、彼女が罪のない人間であると信じられるためには、その接吻だけで十分だったのだ。それに洗濯女の話が本当であり、アルベルチヌは自分の好みを私に隠したのだとしても、それは私を悲しませないためではないか、と語り手は思えるようになる²⁵⁾。たとえ嘘であるとしても、そこにはむしろ愛情と思いやりがあることを認めなければならない。美しく優しいアルベルチヌが、生きていたときのよう蘇り、甘美な「解毒剤」を口に差し伸べてくる以上、それを拒絶できるだろうか。かくして極限までの苦悩を経て、そこからの回復への動きが心の中に発生する。エメの調査旅行により、語り手は求めていたアルベルチヌに関する真実を手に入れることはなかった。それに代わって獲得する、あるいは見えてくるのは、疑惑と信頼、苦痛と幸福感との間の振動を繰り返しながら、その振幅を徐々に減じて無関心へと収斂してゆく自分の心の現実である。

たとえ罪深い女であるとしてもアルベルチヌを許そう、優しく素直だったアルベルチヌに免じて、彼女の行動の全てを許そう、という気持ちが語り手の心のうちに生じる。これは有罪であることを認めさせた上で、許そうというのではない。罪があるからこそ許そうというのではない。また自分の側にも咎があることはしばしば確認されているとしても、自分の罪深さを告白しようというのでもない。ブルーストの小説において魂の真実の探求は、そうした裁きへとつながる一義的な真実の追求とは別のところでなされるのである。これ以降、語り手が徐々に確認していくのは、アルベルチヌに対する自分の思いの沈静化であるが、それは有罪性の観念の無害化を通して実現することになる。

人が苦悩から回復するのは、それを余すところなく経験することによってのみである。アルベルチヌをあらゆる接触から守ることにより、彼女が無実であるという幻想を作り上げることにより、また後には彼女が今も生きているという思いを推論の基礎とすることによって、私は回復の時を遅らせてただけであった。というのも私は必要な苦悩が終わる前に展開すべき長い時間を先延ばしにしていたからである。ところがこうしたアルベルチヌの罪深さという思いに対しても、習慣が作用するときには、私がすでに経験した同じ法則に従ってなされることになるであろう。ゲルマントという名が睡蓮の浮かんだ川沿いの道やジルベール・ル・モヴェエを描いたステンドグラスといった意味や情趣を失い、アルベルチヌが姿を見せても海の青い起伏が現前することはなくなるのと同様に、(中略) アルベルチヌの有罪性が与える苦痛の力も、習慣によって私の外へと送り出されるのであろう。その上、この間には、両面からの同時攻撃のように、習慣の働きにおいても左右の連合軍はお互いに援助しあうのである。アルベルチヌの有罪性という思いは、私にとってますます事実らしく思われ、それに慣れ親しんでいくからこそ、より痛みの小さいものになっていく。しかし他方、この思いに伴う痛みがより小さなものになっていくからこそ、

この有罪性の確証に対する反駁は、ひどい苦しみは避けたいという願いからわが知性に吹き込まれているだけなので、一つ一つ脱落していくのである。そしてそれぞれの動きが協力相手の動きを速めるので、私はアルベルチヌの無実への確信から、彼女の有罪性への確信にかなり早く移行して行くであろう。アルベルチヌは死んだという思い、彼女は過ちを犯しているという思いが私にとって習慣的なものとなり、つまりこうした思いを忘れ、ついにはアルベルチヌ自身を忘れるためには、私はこうした思いとともに生きる必要があったのである²⁶⁾。

アルベルチヌが有罪であるという観念そのものに慣らされると、その痛みは減じてゆき、痛みが減じてゆくからこそ、彼女の有罪性はますます受け入れやすいものとなってゆく。苦しむことが習慣になると、人は徐々にこの苦痛に慣らされ、それに苦しまなくなってくるからである。ピシャがつとに指摘し、ブルーストの語り手が敷衍している習慣の感覚鈍化作用と活動の间歇性はここで十二分に効力を発揮し²⁷⁾、倫理的な課題と思えるものに対しても、観点の移動を提起するのである。「アルベルチヌの物語」は習慣に関する生理学的な理論と、多様な自我の间歇性に基礎を置く人格の複合性に関わる省察を、生きる時間の細分化と心の映像の無限増殖、そしてその磨耗と消滅として全面的に展開し、そのことを通じて「有罪性」という思想史的にも重い課題を、愛と忘却の力学の時系列を記述する一つの助変数へと転じてみせる。

4. 真実の相対化と語りの構造

忌まわしい映像とそのもたらす苦痛の、習慣の働きによる無力化は明瞭に展望されているとはいえ、物語のこの段階で忘却が成就しているわけではない。語り手は夢の中でアルベルチヌに何度も再開し、地図を見てもまたいくつかの地名を耳にしても、彼女を思い出す。そのなかで特にパリのビュット＝ショーモン公園がまた一つの疑惑の核となる。ボンタン夫人の話では、そこへ

アンドレと一緒にアルベルチヌはよく出かけたらしいのだが、アルベルチヌは一度も行ったことがないと言っていた²⁸⁾。パリでの同棲生活の時期、恋人を一人で外出させたくない語り手がその同伴者として選んだのが、バルベックでの若い女性グループの中でアルベルチヌと特に親しかったアンドレである。アンドレと一緒になら心配ないと考えていたのだが、実は彼女こそむしろ快樂のパートナーだったのではないか。これは二度目のバルベック滞在に先立つ時期のアルベルチヌの行動への関心、中でも、約束にもかかわらず語り手の家になかなか姿を見せず、遅くなって外から電話をかけてきた夜の記憶を呼び覚ます。シャワー係や洗濯女の映像は、「廊下の暗がりになされた家具を、見分けなくてもぶつからずに通れるように」、記憶の隅に依然とどまっていますが、すでに慣れきっている。それに代わって、彼女の生活の内で語り手の「心の外」にあった部分が「習慣の重いヴェールを持ち上げて」、新鮮で刺すような感覚とともに戻ってくる²⁹⁾。あたかも「各々の異なるアルベルチヌ、各々の新しい思い出が、嫉妬の個別問題を提起し、他の問題の解決法はそこに適用できない」かのように³⁰⁾。

少なくとも肉体的な苦痛の場合は、われわれは自分で痛みを選ぶ必要はない。病気がそれを決定し、われわれに押し付ける。しかし嫉妬の場合は言ってみればあらゆる種類、あらゆる大きさの苦痛を試してみて、自分に合うと思えるものを選び取る必要がある³¹⁾。

語り手はこのように述べ、そうした選択の困難を訴えるのであるが、逆に言えば嫉妬はその苦痛の形態を選択できる程度にまで緩和されている、とみなすこともできる。家にやって来たアンドレに、語り手が彼女自身の同性への好みやヴァントィユ嬢との関係について尋ねると、アンドレは自分については苦もなく全てを打ち明ける。しかしそこからアルベルチヌとの関係についておのずと引き出せるはずの結論を確認しようとする、アンドレはこれを完全に否

定する³²⁾。アンドレ自身が同性への嗜好を持ち、そのことを認めた上で、アルベルチヌとはあれほど親しい間柄でありながら肉体的な関係がなかったと言うからには、アルベルチヌへの疑惑は妄想であったということなのか、それともアンドレの言うことは死者への配慮によるものなのか。ここでブルーストの小説はジャンルの歴史へと目配せを送る。伝統的な小説作法における、消息に通じた人間からの伝聞を真実として小説家が再現する語りの形式を取りあげ、アルベルチヌについて、そのような事情を知る人間に出会えたらどんなにいいだろう、とブルーストの語り手は嘆いてみせるのである。

小説家は序文の中で、ある土地を旅行中にさる人物に出会い、この人物がある人間の生涯を自分に語ってくれたと、しばしば主張している。その上で小説家はこの旅の友に発言を譲り、この人物が小説家にした物語が、まさに当の小説となる。かくしてファブリス・デル・ドンゴの生涯は、パドヴァのある教会参事会員によって、スタンダールに語られたのである。われわれが人を愛するとき、つまり一人の他人の生活が神秘的に思えるとき、こうした消息に通じた語り手に出会えたらと、どれほど願うことだろう。そうした人物はなるほど存在する。(中略) アルベルチヌについて私に物語ることができたはずのこうした人間は存在していたし、また相変わらず存在している。だがわれわれがこの人物に出会うことは決してない。アルベルチヌを知った女性を見つけられたなら、自分の知らないことを全て教えてもらうのにと、私は考えていた。しかし他人の目には、私以上に彼女の生活を知ることのできる人間はどこにもいないと見えたと違いない。彼女の親友、アンドレとも私は知り合いだったのである。(中略) 「そうした証言者と知り合っていたなら」と私は考えていたが、知り合っても私はアンドレから入手する以上のものは何も、この証言者から得ることができなかったであろう。アンドレは秘密を握っているが、それを明かそうとはしなかった³³⁾。

この時期語り手は新たな女性たち、とりわけアルベルチヌの階層の女性たち、彼女が好んだであろうと思われる女性を誘って「代用品」とするようになる。このような流れの中で半年ほどたって、次にアンドレが語り手を訪ねる際には、語り手は彼女と「半ば肉体関係を持つ」ようになっている。そうした行為のさなかで「アルベルチヌと関係した女と関係が持ちたい」という願望を語り手がアンドレに語ると、アンドレは前言を完全に翻し、アルベルチヌと過ごした女同士の情熱的な時間について、包み隠さず話し始めるのである³⁴⁾。彼女の話の中には、アルベルチヌが美男のバイオリニスト、モレルに未経験な庶民の娘たちを誘惑させ、彼が楽しんだあとで次々に自分に回すようにさせたという不良じみた過去の行為や、語り手との同棲の時期、ゲルマント公爵夫人訪問から帰宅した語り手に、アンドレと一緒にいたアルベルチヌが部屋の明かりを消してすぐドアを開けず、困惑した様子を語り手の持つバイカウツギにかこつけて隠そうとした夕刻の真相などが含まれている³⁵⁾。ただアルベルチヌは悪行をひどく後悔してもいて、語り手との同棲中はそうした欲望を抑えようと努力していたのであり、そこから抜け出すためにも語り手との結婚を望んでいたのだろう、そして語り手のもとから出て行くことがあれば、アルベルチヌはまた悪徳の世界に戻ることは確実であったので、結局そうしたことから自殺する人間も出て、彼女自身も命を絶つことになったのではないかと、という解釈をアンドレは付け加えている。事態の真相が明らかにされたのかと語り手も、また読者も一瞬思うところであるが、それは語り手にとってもはや「遅すぎた真実」、「気の抜けた毒薬」に過ぎないものとなっている³⁶⁾。アンドレによっていとも簡単に告げられた真実は、「自分の心のうちに場所を見つけてやれない」ので、自分の外側にとどまっているからである。

人は真実が単なる文、自分が何度も考えてきたことと同様の一文ではなく、何か新たな兆候で自分に明らかにされることを望むものらしい。考える習慣はしばしば現実を経験することを妨げ、現実に対して免疫性を与

え、これもまた思考のように見せてしまう。可能な反論を自分の内に持っていない観念はひとつもなく、また逆の言葉を自分のうちに持っていない言葉もひとつもないのである³⁷⁾。

愛さなくなれば人は多くを知りうるが、もう知る必要はなくなっている、と語り手はここで指摘する。愛を生きていたかつての人間（あるいは自我）はもはや存在しなくなっているのですべてが容易になると同時に、すべてが無効になっている、と言うのである。しかもそれは「アンドレが本当のことを言っているという仮定」に立っての話である。アンドレは語り手と親密になったために、語り手に対して誠実になり、本当のことを述べるようになったとも考えられる。しかしアルベルチヌに愛された語り手の幸福とうぬぼれに苛立ち、語り手を苦しめてやろうと嘘をついたとも考えられる。アルベルチヌはアンドレにとって完全に死んだ人間となっているので、彼女はこの死者にもはや恐れを抱いていない。しかしそのことで真実を漏らさないというアルベルチヌとの約束を破ることも可能になるが、またアルベルチヌを中傷する嘘をつくこともそれと同様に可能になる、と語り手は考えをめぐらせる。語り手はここでアンドレの性格の特徴を振り返り、後者の可能性を裏付ける根拠ないし推論も十分に示している³⁸⁾。そうすることによって、その内部においては矛盾を含まず筋の通る二つの仮説を並列させ、いずれも同程度に有効なものとして提示するのである。複数のアルベルチヌが存在した以上、彼女の物語も複数の筋書きを持っている。そうした複数の筋書きをいずれも穏やかに、あるいは興味深いものとして受け入れられるようになったとき、アルベルチヌの夥しい映像の数々は、すでに磨耗し、輝きを失っている。そうしたことは、もっと早い段階で、実はわかっていたことでもあった。

彼女「アルベルチヌ」の人格や行動について、それらが私にとって持つ重要性と他者にとっての重要性の違いに気づき、私の愛は彼女に対する愛

であるよりも私の中にある愛であることを理解した時、私は自分の愛のこの主観的な性格から様々な帰結を引き出すことができたはずであった。そして自分の愛は心の状態なのだから、当の人間が亡くなった後もかなり長く生き延びる可能性はとりわけあるが、この愛はその対象である人間と本当に繋がっているものではなく、自己の外にはいかなる支えも持っていない。だからあらゆる心の状態と同様に、最も長続きするものであっても、いつかは使用済みになって「取替え」られるのであり、その日がくれば私をアルベルチヌの思い出にかくも優しく、またかくも絶ち難く結び付けているかにみえるあらゆるものが、私にとってはもはや存在しなくなるであろう。私はそう考えられたはずであった。人間がわれわれにとって、思考のなかのとても消耗しやすい収集図版に過ぎないというのは、人間の不幸には違いない。そうであるからこそ、人は彼らについて思いの熱意をこめた計画を立てるが、思いは消耗し、記憶は壊れてゆくのである³⁹⁾。

アルベルチヌの出奔の理由については、アンドレは語り手の予期していなかった解釈を示し、また彼女自身のその後の人生の選択により、この解釈に裏づけを与える。ここでいわばデウス・エクス・マキナの役割を演じるのがヴェルデュラン夫人の甥で、バルベックでは金持ちの道楽息子として遊興に明け暮れていたオクターヴである。語り手との同棲の時期、アルベルチヌからヴェルデュラン家への訪問予定を告げられた語り手は、これを巧妙に妨げ、自分だけで夜会に出席したのであるが、この日ヴァントィユ嬢も招かれていることを知らされて、アルベルチヌは彼女とここで落ち合う予定だったのだと確信し、不信と疑惑を強めたのであった⁴⁰⁾。しかしアンドレによれば、オクターヴはアルベルチヌとの結婚を望んでいて、彼とアルベルチヌを再会させるために、ヴェルデュラン夫人はアルベルチヌを招いたのが実情だという。またボンタン夫人は語り手がアルベルチヌと結婚するのを待っていたが、そうならない場合に備えて、オクターヴを予備に残しておいたのであり、語り手が態

度を決めないので、時機を見てアルベルチヌを呼び戻したのであると解説する⁴¹⁾。さらにヴァントウイユ嬢との関係については、彼女もその女友達もアルベルチヌが同類であるとは思わず、その道に誘うことはなかったし、そうであることを知ったときには、すでに相手を知りすぎていたので、あらためて仲間に入れるということはできなかったのであると⁴²⁾。こうした解説を根拠付けるかのように、この話をしてしばらくたってから、アンドレはオクターヴと結婚することになる。同性への嗜好を隠さなかったアンドレが結婚したのをみれば、アルベルチヌとの間の交渉も、それほど重大なものではなかったのだらうと、語り手には思えてくる。

となると私が作り上げたアルベルチヌに関する不安の見取り図は別の見取り図に取り替える必要がある。あるいはそれに別の見取り図を重ねなければならない。というのも、女に対する嗜好が結婚を妨げないのだから、一方の見取り図が他方を見取り図を排除するわけではないからである。この結婚が本当にアルベルチヌの出で行った理由だったのだろうか。そして自尊心から、叔母に依存している様子は見せまいと、あるいは私に結婚を強要するようなどころは見せまいと、そのことを私に言いたがらなかったのだろうか。私が理解し始めたのは次のようなことであった。アルベルチヌは女性の友人たちとの関係で、自分がやって来たのはその人のためにであると一人一人に信じさせたものであるが、そのとき彼女が実践していた、ただ一つの行動に数多くの原因を持たせる方式というのは、人が身をおく視点に依拠して一つの行動が呈する様々な様相の、人為的で意図的な象徴の如きものに過ぎなかったのであると。アルベルチヌが私の家で、叔母を困らせかねないあいまいな立場にあったということは一度も思ってみなかった。そのことに私は驚きと一種の恥ずかしさを感じたが、この驚きはこれが最初でもなければ、これが最後にもならなかった⁴³⁾。

複数の見取り図を重ね合わせることで、これは物語自体が要請しているこの小説の読み方に他ならない。一つの行動が視点の取り方に応じて多様な様相を呈するのは、ブルーストの小説において、一つの出来事がしばしば複数の人間関係に関わり、複数の筋や主題の構築に寄与するように作られているからである。アルベルチヌは彼女自身の多面的な振舞いによって、そうした人格の複数性を進んで引き受けるかのように行動する。アルベルチヌがその人間関係の構築において巧みに採用していたのが「親切の中の二枚舌」であった。これは「花咲く乙女たち」の段階で詳しく例示・分析されており⁴⁴⁾、嘘の一形式ではあるが、その動機は多くの人に親切でありたいという善意に発している。この分析は彼女がみんなから好かれ、社交的な成功をおさめた理由を述べる文脈の中におかれているが、しかし同時にこの「一行動の多重利用原理」は「ある種の功利的人間、ある種の成り上り者」に特有な不誠実の形式とされている。そうした人たちは一つの行動で一人の人間だけを喜ばせることにとどめず、それが複数の当事者に対する親切ないし奉仕として同時に機能するように振舞うというのである。この技術を完成された形において実践しているのが外交官ノルボワ氏である。彼は国際的な善意の仲介活動において、「多重目的の手口」により、紛争当事国の一方から依頼された仲介を、他方に対してはそちらへの好意ないし配慮から発した出た行動であると信じさせ、双方からの感謝を引き出すことに巧みなのである。ノルボワはこの手口を職業上・社交上の人間関係においても好んで用いるので、きわめて「世話好きな人間」として多くの人から頼りにされるが、語り手の父は彼の親切が含まれている不誠実を見抜かず、学士院会員への立候補の際、手痛い計算違いをすることになる⁴⁵⁾。

「一行動の多重利用原理」は外交手腕ないし社交技術の領域から、小説作法に転用が可能であることが語り手には見えていたのだろうか。というのもこの原理を小説の外側に設定すれば、序文中の鍵概念のようにも機能しうるのである。一つの出来事に複数の原因や目的を付与しつつ、複数の筋でこれを利用する契機を増殖することによって、ブルーストの小説はその構成要素の振舞い

方が一義的に記述できない不確定性に満ちた世界を作り出している。問題の原理はアルベルチヌの行動様式を象徴ないし母型（マトリス）として、これを書く行為のレベルに位相を移して実践させることにより、この小説の語りの構造を生産しているかのようである。バルベックで語り手が、乙女たちの一団の中からアルベルチヌを意中の人間として個別化するようになったとき、心の中でつぶやいた「僕が自分の小説をものにするのは彼女と一緒にであろう」という言葉は⁴⁶⁾、こうして物語内容と物語形式の二つの水準で現実のものとなっているかに見えるのである。

Notes

- 1) T.R., IV, pp. 284-285.
- 2) A.D., IV, p. 82.
- 3) A.D., IV, p. 60.
- 4) A.D., IV, p. 70.
- 5) A.D., IV, p. 71.
- 6) A.D., IV, p. 72.
- 7) A.D., IV, p. 70.
- 8) S.G., III, p. 497.
- 9) S.G., III, p. 499.
- 10) S.G., III, p. 503.
- 11) S.G., III, p. 508.
- 12) P., III, p. 527.
- 13) A.D., IV, pp. 71-72.
- 14) A.D., IV, p. 95.
- 15) A.D., IV, p. 73.
- 16) A.D., IN, pp. 96-97.
- 17) A.D., IV, p. 98.
- 18) A.D., IV, p. 99.
- 19) A.D., IV, p. 101.
- 20) A.D., IV, p. 104.
- 21) A.D., IV, pp. 105-107.
- 22) A.D., IV, pp. 108-109.
- 23) A.D., IV, p. 109.
- 24) A.D., IV, p. 110.
- 25) A.D., IV, p. 111.

- 26) A.D., IV, p. 117.
- 27) 上記引用にすぐ続くページには、次のような語り手の自己省察がある。「それに死んだアルベルチヌスに対する愛のこうした再発は、他の人間への興味をしばしば交えた無関心の期間をおいても起こることがあった。ちょうどバルベックで接吻を拒否されてあとには長い中休み期間があり、その間私はゲルマント夫人やアンドレやステルマリア嬢のほうをずっと多く気にかけていたのであるが、アルベルチヌスとまたよく会うようになると、彼女を再び愛し始めたように。ところが今でも別の関心事が別れを－今度は死んだ女との別れであるが－もたらし、彼女には冷淡になることがあった。こうしたことすべては、彼女が私にとっては生きた女であるという同じ理由から生じるのである。もっと後になり、彼女にこれほどの愛着を持たなくなっている頃になっても、私にとってそれは、すぐに倦んでしまうものの、しばらくの間休息させれば回復するあの欲望の一つであり続けた。私は生きている一人の女、次いで別の女と追いかけては、私の死んだ女へと戻ってくるのであった。」(IV, p. 118) 無関心の期間を間に挟んでおこる愛の再発は、ビシャ生理学にみる動物機能の活動期間と休眠期間との交替によく対応している。動物活動をする器官は疲労すると休眠を必要とし、しばらくたてば活力を回復する。同様にアルベルチヌスに対する語り手の愛は、退屈すると別の女に関心を移動させ、その間の休息を経て、再び欲望として回復する。これはアルベルチヌスの生前も死後も変わらない、と述べられているのである。
- 28) P., III, p. 890.
- 29) A.D., IV, p. 124.
- 30) A.D., IV, p. 125.
- 31) A.D., IV, p. 126.
- 32) A.D., IV, pp. 127-129.
- 33) A.D., IV, pp. 131-132.
- 34) A.D., IV, p. 179.
- 35) cf. P., III, pp. 563-564.
- 36) A.D., IV, p. 181.
- 37) A.D., IV, pp. 181-182.
- 38) A.D., IV, pp. 183-184.
- 39) A.D., IV, p. 137.
- 40) cf. P., III, pp. 595-599; pp. 608-611; p. 698; pp. 728-730.
- 41) A.D., IV, p. 193.
- 42) A.D., IV, pp. 196-198.
- 43) A.D., IV, p. 194.
- 44) J.F., II, pp. 290-292.
- 45) C.G., II, pp. 448-449; pp. 521-523; pp. 554-560
- 46) J.F., II, p. 268.